“人”としての基本を備えた社会人を育てたい

船橋情報ビジネス専門学校
〈千葉県船橋市〉

時代の変化とともに，情報処理技術はどの職種，職場でも欠かせないものになっている。船橋情報ビジネス専門学校では，その専門的な知識と技術をベースに，人間としての基礎力を兼ね備えた人材を育成しようと，さまざまな取り組みを行っている。特にビジネスライセンス学科では，秘書検定，サービス接遇検定を導入し，ビジネスマナーの実践にも力を入れている。同校ビジネスライセンス科の取り組みを伺った。

ビジネスライセンス科の学生が学ぶ
３号館

技術や資格はあくまでも手段 仕事は人対人でするもの

船橋情報ビジネス専門学校には、その校名が示す通り、情報処理技術を専門に学ぶ学生が集まっている。3年制のITエンジニア科、2年制の情報処理科・情報ネットワーク科・Webクリエイター科・ビジネスライセンス科からなり、学生数は約530名、その約8割が男子学生だ。午前に90分×2コマ、午後は1コマで、15時10分に授業は終わるが、各種検定試験前には、教員の指導の下学生たちは合格に向けて遅くまで残って勉強する。

「情報技術に関する専門の知識と技術を身に付ける学校ですから、当然、覚えることは多く、勉強は難しい。入学時に学生にははっきりとそう伝えています。その代わり、2年あるいは3年、毎日こつこつと勉強すれば、必ず実社会で生かすことのできる知識と技術が身に付くとも話しています」。

同校の教育についてこのように説明するのは、鳥居高之校長だ。

いずれの学科でも専門性の高い教育を行っているが、大切にしている教育の方針は〝人間性を重視すること〟だという。校内には、「時間を守る」「約束を守る」「ルールを守る」の三つの約束が掲示されている。

「技術や資格はあくまでも手段です。情報技術がどれほど発達しようとも、仕事をするのが人間であることに変わりはありません」。

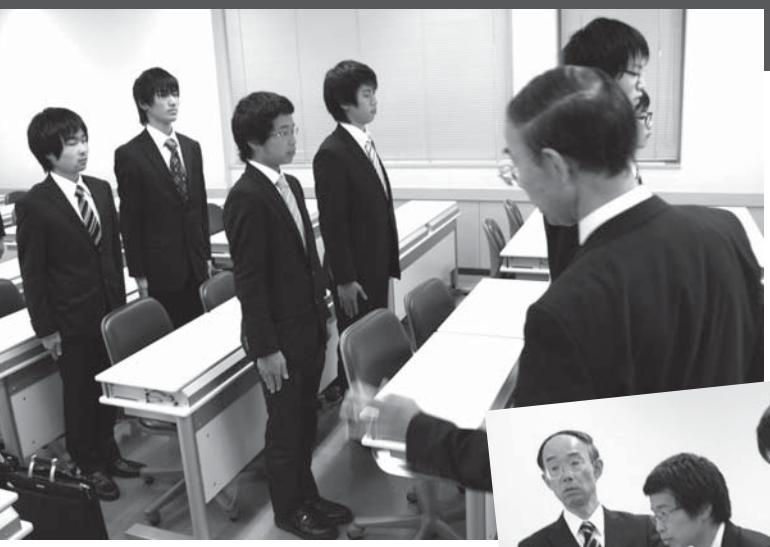
同校では、人と人とが関係して仕事をしていくために必要な人間性や社会性を重視しており、全教職員がこれを意識して学生と接しているという。

「もちろん技術は必須ですが、それさえあれば社会で仕事をしていけるわけではありません。就職活動などでも、あいさつなど基本的なことがきちんとできる学生から先に決まっていきます。企業の方が重視されるのは、やはりコミュニケーション力。それほど難しいことではなく、他人の話がちゃんと聞けて、自分のことが話せるということです。それにプラスして技術がしっかりしていれば、言うことはないわけです」。

このようなことは一回話して通じるというものではないため、入学式や新入生の研修合宿など、折に触れて繰り返し話をするそうだ。

社会に出れば、チームを組み、協力会社やお客さまとも接しながら仕事を進めることになる。たとえずば抜けた技術力があっても、それだけでは非常に狭い範囲での仕事しかできないだろう。

「最近は多くの学生が理解していると思いますが、それでも他人との関係に思いが至らないような学生には『一人では生きていけないよ』ということを機会を見て話すようにしています。日常生活で考えてみても、あらゆる場面で他人の世話になっているのですから」。



サービス接遇検定面接試験の
指導の際は全員スーツを着用。
まずはピシッとした立ち姿から
前傾姿勢，そしてお辞儀の練習を徹底

鳥居高之校長

サービス接遇検定を指導する
高橋豊先生

サービス接遇検定で意識の変化を促す

ビジネスライセンス科は事務系の情報技術職を目指す学生が多く、営業、販売、事務、カスタマーエンジニアなどが中心である。他学科と違い、男子と女子の割合は半数ずつで、一学年は約70名。今はどんな業種でも、パソコンそして情報処理技術を使わない職場はほとんどない。簿記を学んでお金の流れを理解しているだけでなく、コンピューター上のさまざまなプログラムを自在に使いこなせるようになるというのが、同科の大きな特徴だ。

「私たちが目標としているのは、社会に通用する実務力の育成です」と話すのは、ビジネス実務の指導を担当する高橋豊先生だ。

鳥居校長が話したように、社会人としての基礎力を重視する同校では、全学科で座学を中心としたビジネス実務の授業を取り入れマナーについて学んでいるが、ビジネスライセンス科では秘書検定、サービス接遇検定に取り組んでいる。女子は6月に秘書検定2級、11月に準1級を受験し、男子は11月にサービス接遇検定2級・準1級を受験する。授業はいずれも週2コマ×90分。これらの検定を導入した理由は、やはり〝面接試験〟があることが大きいと、サービス接遇検定の指導を担当する高橋先生は話す。

「マナーは情報技術分野でも重要です。これがないと、常識外れの人間だと思われてしまいますし、会社の中で人間関係を築いていくこともできなくなる。今は、就職が厳しいからこそ、結局のところ人間力、人柄が大切にされる時代だと感じています。それを鍛えるためにも、実際にマナーを体現できるようになることは大切だと思います」。

面接の練習を通じて見られる学生の変化は、相手を意識するようになるということ。敬語の使い方一つにしてもＴＰＯをわきまえるようになったと感じられるそうだ。

「普段は少しくらいふざけたりもしますが、その時が来たら『今はやらなきゃいけない時だ』と気が付き、その雰囲気に応じてきちんと切り換えができる。そのことに彼らは自分で気付いていますし、もちろん周りも気が付いています。するとおのずと顔つき、姿勢、言葉遣い、全てが変わってきます。この変化を見るのがうれしいですね」（高橋先生）。

これからサービス接遇検定準1級面接試験を受験するという1年生の男子に対する実技指導の様子を見せていただいた。高橋先生はお辞儀やロールプレイングの指導をしながら、身だしなみやお辞儀の仕方など「ここが弱いな、できていないな」と気になったことをその都度一人一人に指摘していく。

「面接に関しては、一人一人をしっかり見て指摘することを重視しています。『○○さん、ここはこうした方がいいですね』と学生の方

2年生の久保禎久さん（左）と林秀明さん。2人とも準1級に合格し，カスタマーエンジニアとしての就職が内定している

面接試験を想定し，一人ずつお辞儀と言葉遣いを練習。ネクタイや襟が曲がっていないか，歩き方はどうか，一人一人チェックして指摘する

も、自分の名を呼ばれて受けた指導のことは忘れませんから」。

学校としてスーツの日を設けており、その日は男子も女子もきちんとスーツを着て登校するが、ビジネスライセンス科では面接の授業に入ったら、サービス接遇検定、秘書検定の授業にもスーツで臨むことになっている。「形から入ることが意外と大事なのです」と高橋先生。スーツは着慣れていないことが不自然さにつながるため、1年生のうちから慣れておくことで2年生になると見違えるように板についてくるそうだ。

ビジネスライセンス科2年生の久保禎久さん、林秀明さんは、昨年度にサービス接遇検定2級・準1級に合格し、既にカスタマーエンジニアとしての就職が決まっている。

久保さんは「カスタマーエンジニアになるには、技術と接客、どちらも大事だと分かっていたので、サービス接遇検定には絶対合格したいと思っていました。2級では、複雑な場面が出てくるのが難しかったです。準1級面接試験では少し早口になってしまいましたが、練習のおかげで入室から退室までスムーズにでき、よい経験になりました」と話す。

林さんも「準1級面接試験ではとても緊張して、笑顔が足りないと指摘されました。でもそのおかげで就職の面接にとても役に立ちました。大学生と一緒の集団面接だったのですが、あいさつやお辞儀、話し方などには自信を持てましたし、接遇について勉強してきたことがアピールにもなりました」。

自然な笑顔でハキハキと話す二人に、高橋先生も成長の大きさを感じているようだった。

勉強だけでなくさまざまな経験が人を磨く

人間としての基本を重視する同校だが、教育理念がまた面白い。

「若者をハッピーに！」。簡単に、分かりやすく聞こえるが、ここには実にさまざまな意味が込められている。充実した学生時代を過ごしてほしい、勉強だけでなくいろいろな活動に取り組んで楽しみを見出してほしい、友人や教員とよい人間関係を築いてほしい、そして何よりも、社会人として自立し、働いていけるだけの力を養ってほしい。

「資格や技術の取得にはもちろん力を入れていますが、勉強だけしていればそれだけで企業の面接に通るかというと、そういうわけではありません。他に何も語ることのない人より、さまざまな経験をし、そこから多くを学び身に付けてきた人の方が魅力があるはずです。とにかくいろいろな活動をすることを進めています」と鳥居校長は言う。

中でも推奨しているのはアルバイトだ。職場の人やお客さまなど、多様な年齢の人と接し、社会性を身に付ける経験としては大きな意味がある。高橋先生も「マニュアル化したマナーは役に立たないという人もいますが、お客さまと接するという『経験』それ自体が大変役に立ちます」と話す。

学校行事も充実している。部活動や学園祭（若幸祭）、体育祭、地域の美化運動や卒業研究としてのグループでのフィールドワークなど、忙しい勉強の合間を縫うように、皆で一致団結して活動できる取り組みを数多く取り入れている。「楽しむと同時に、形のないものを形にするというプロセスも経験してほしい」と鳥居校長。

「企業の方に話を聞くと、社会人としての基礎ができているということの他に、自分で考え行動できる人、そしてのびしろを感じられる人が求められていると感じます。これは教えるのがなかなか難しい。授業以外の活動を通して、自分たちで何か考えて作り上げるという経験を積んでいってもらいたいと考えています」。